

# 「田んぼの学校」 教育実践報告書

和歌山県有田市立糸我小学校

代表者 校長 和田 啓次郎

所在地 〒 649 - 0421

和歌山県有田市糸我町中番 3 3 0

TEL 0 7 3 7 - 8 8 - 7 1 1 6

FAX 0 7 3 7 - 8 8 - 5 3 9 8

## 1、取り組みのねらい（動機）

本校は和歌山県中部の有田市の東端に位置する全校児童 8 1 名の小学校である。

校区の北側には有田川が流れ、南側は紀伊水道と校区を隔てるように 2 0 0 m 前後の里山が連なっている。校区の中央を熊野古道が南北に走り、学校周辺はミカン畑や水田が多く、有田市内でも豊かな自然が特に多く残されている地域である。

しかし、そのような地域においても平成に入った頃から、児童達の生活体験や自然体験等様々な体験の不足から来る弊害が生活面、学習面で多く見られるようになってきた。

例を挙げると、様々な教科・領域等の学習内容と児童個々の実体験と結びつけることが難しく学習を深めていきにくい、子ども達の偏食による給食の残食量に著しい増加が見られる、様々な年齢層の人々と関わる機会の減少による人間関係の希薄化、コミュニケーション能力の低下、問題行動の増加が見られるようになってきた等々である。

また地域社会においても、人口の減少、高齢化により、地域行事の運営や伝統文化の継承等が難しくなり、地域の活気が失われていくのではないかという危機感が地域住民の間に広がってきた。

そこで、子どもから老人まで地域の様々な年齢層の人々が一緒になって活動する中で、学校の教育課題や地域の課題を克服する方法はないだろうか、糸我地区青少年育成会や学校が協議し、取り組みを始めたのが、「田んぼの学校」（糸我小学校と糸我地区青少年育成会が共同でアイガモ農法による無農薬の米作り）の実践である。

## 2、取り組みの経緯

- (1) 本実践は糸我地区青少年育成会と糸我小学校による共同事業である。
- (2) 本実践は平成 1 3 年（2 0 0 1 年）より開始され、本年度で 1 7 年続く事業である。
- (3) 本実践は J A ありだ、有田川土地改良区、有田市、有田振興局（農業水産振興課）等の関係機関の後援、指導の下に実施する。
- (4) 糸我小学校では、総合的な学習の時間や特別活動（学校行事）等の時間を活用し、5 年生を中心として全学年で取り組む。
- (5) 本事業は「田植え」「稲刈り」といった農業行事を単発的に体験させるのではない。種まき、苗取りに始まり、アイガモの孵化、検卵、飼育、放鳥、雑草取り、稲刈り、脱穀、米の販売まで、アイガモ農法による米作りの全過程に地域の様々な年齢層の人々とともに子ども達が積極的に関わるなかで、自然の崇高さ、生命の尊さ、食料

の大切さ、勤労の尊さ、協力することやコミュニケーションの大切さ等々を学ぶことを目的としている。また、それらの活動を通し各教科・領域等の学習を深化させ子ども達の真の意味での学力向上を図るとともに、コミュニケーション能力や人間関係構築力を高めていくことも目標にしている。

- (6) また、地域社会側は、小学生とともに「田んぼの学校」の実践をおこなうことにより、地域に魅力と活力を取り戻し、それが伝統文化の継承、地域行事の維持運営等様々な地域活動にプラスの効果を出し、ひいては地域の人口減少と高齢化率の低下に歯止めをかける起爆剤となることを期待している。

#### (7) 年間の取り組みの経緯

◎**種まき**（5月上旬）…5年生が、キヌヒカリ（4Kg）黒米（1Kg）の種まきを山崎佳彦氏の田でおこなう。山崎佳彦氏（前糸我地区青少年育成会会長・現有田市青少年育成市民会議会議長）は、田んぼの学校の取り組みのスタート時から中心となって活動に関わってくれている地域側の代表者である。



◎**アイガモの孵化**（5月中旬から）…毎年、5年生が中心となり、アイガモの卵20個程度を糸我小学校に設置した孵卵器（アイガモ農法を実践している県内他地方の農家から借りたもの）に入れ約25日ほどかけ孵化させる。孵化までの日々の世話（孵卵器内の温度、湿度管理）も5年生の担当である。



※孵卵器へのアイガモの卵の入卵の様子。（本年度は22個入卵）



※5月下旬、アイガモの卵の成長具合を見るため、卵を孵卵器から出しチェックしている様子。(本年度は22個中18個の卵の順調な成長を確認)



※6月中旬、16羽のアイガモの雛が無事誕生する。



※孵化したアイガモの雛は、別途購入したアヒルの雛とともに10日程度、糸我小学校で飼育。雛の世話は5年生で行う。(田んぼへの放鳥に備える)



◎**苗取り**（6月中旬）…前述の山崎佳彦氏の田で、翌日の田植えに備え5年生が糸我地区青少年育成会とともに苗取りをする。苗取りとは田植え時に稲の苗を手を持ち、植え付けやすいように、小分けにして束ねる作業である



◎**田植え**（6月中旬）…「田んぼの学校」の取り組み開始時から毎年お借りしている故梅本武彦氏の田で糸我小学校全校児童、教職員、糸我地区青少年育成会会員の皆さん総出（約200名の参加）で田植えを行う。例年この田植えには有田市長、副市長、有田市教育長、県有田振興局長らも参加いただき一緒に田植えを行い、マスコミ各社（新聞社、ラジオ局、テレビ局）等による取材も行われる。



◎**ネット、電柵設置**（6月中旬）…田に放鳥する、アイガモ、アヒルが逃げ出さないよう、また田への野生動物の侵入を防ぐため、糸我地区青少年育成会会員、糸我小学校PTA会員、児童有志らで防護ネットと電柵を設置する。





◎**放鳥**（6月下旬）…田に、全校児童と糸我地区青少年育成会会員有志の立ち会いの下、ある程度成長したアイガモ、アヒルの雛合計33羽（アイガモ16羽、アヒル17羽）を放鳥する。アイガモとアヒルたちは8月下旬までの2ヶ月間 田で稲の害虫や雑草の駆除にがんばります。



◎**田の雑草取り**（7月～8月）…アイガモとアヒル達もがんばってくれるのですが、アイガモとアヒルだけで取り切れなかった雑草取りを子ども達が田に入って行います。



◎**アイガモ、アヒルの引き上げ**（8月下旬）…2ヶ月間 田で稲の害虫や雑草の駆除ご苦労様。アイガモ、アヒルをこれ以上、田に入れておくと、実り始めた稲穂を食べ始めるので糸我地区青少年育成会会員と5年生の子ども達で田から引き上げます。



◎**稲刈り、脱穀**（９月下旬～１０月上旬）…糸我地区青少年育成会会員と５年生の子ども達でおこないます。



◎**収穫した米の試食**（１０月中旬）…この後、収穫した米を５年生の子ども達が各所で販売するため、事前に家庭科の学習で炊飯、おにぎりを作りをして味見をします。



◎**米の販売**（１１月以降）…５年生の子ども達とその保護者、糸我地区青少年育成会会員がＪＡありだの農産物直売所、有田市の産業フェスティバル等いろんなところに出向き有田振興局の指導の下、「田んぼの学校」で収穫された米（キヌヒカリと黒米のセット）を「鴨・米・美」（カモンベイビー）という名前で赤飯セットとして販売します。



（８）米の販売の収益の使い道について  
次年度の田んぼの学校の取り組みの資金に充てられるほか、糸我地区青少年育成会が主催する各種青少年育成事業の費用の一部に当てられます。



### 3、結果（成果と課題）

子ども達に、勤労体験的な学習を通して働くことの大切さや大変さを学ばせる上で大きな効果を上げているほか、自然の崇高さ、生命の尊さ、協力することの大切さ、ものを大切にする心を養うこと等を直に学ぶことができるなど、道徳教育にも大いに役立っている。

また食育や金銭教育などの関連する分野の学習にも役立っているほか、体験と学習を結びつけより深く中身のある思考が可能になるなど、理科、社会科、家庭科等の関連する教科学習にも良い影響を与えている。

それと同時に集団や共同での活動を通して子ども達同士、子どもと地域の大人達の交流やコミュニケーション活動も大変活発に成り、子ども達のコミュニケーション能力の育成や人間関係構築力の形成にも大きく貢献していると考ええる。

また、本活動を通し地域の方々が様々な学校の教育活動に今まで以上に興味を示し、手を貸してくれることが増えてきたことも大きな成果と考えている。

地域の活性化という点から本活動を見てみると、地域の様々な年齢層の人々が本校の子ども達とともに活動する中で刺激を受け、地域の活性化のためにほかにもできることがあるのではないかと幅広く考え、糸我地区青少年育成会主催のキャンプや昔の生活を体験する催し、伝統芸能の継承にかかる活動やコミュニティーの夏祭りの企画運営等様々な取り組みの復興、維持、活性化にもつながってきている。

課題としては、小学校側では本取り組みは目下、5年生を中心として全校児童で取り組むこととしているが、今後の児童数の減少と学年による児童数のばらつきを考えた場合、5、6年生を中心として全校児童で取り組む実践へと移行させていく必要を強く感じている。

また地域側でも本取り組み開始当初から活動をリードしてくれた地域のリーダー層が50代後半～70代にさしかかってきている中で、できるだけ数多くの次世代リーダーの育成が必要になってきていると考ええる。

### 4、苦心談、エピソード

主として自然が相手の取り組みであり、計画通り行かないことや悪天候の中で実施しなければならない場面も多々あり、子ども達の健康や安全面への配慮に毎年苦心しています。

去年は、稲刈りの時期に長雨が続きなかなか稲刈りが行えず、運動会とのバッティングが大変心配でした。また、今年は5月上旬にキヌヒカリと黒米の種をまいたのですが、黒米の発芽が思わしくなく黒米のみ種まきを再度実施することとなりました。

また、一夏働いたアイガモ、アヒルたちは8月下旬に近隣の町の食肉業者に引き取ってもらっています。高学年の子ども達はその事実にうすうす気づいているようですが、事実を知ったときの反応が怖くて低、中学年の子供達には明確には伝えられていないことにこのような対応で良いのかと毎年頭を悩まします。